安成通信　2016/07/31　京都の夏はなぜ暑い？

祇園祭も終わり、京都はいよいよ暑い夏になりました。京都は平安の昔から夏が非常に暑いことはよく知られています。吉田兼好の「徒然草」にも、「(京の）家の作りやうは、夏をむねとすべし」とあります。三方を山で囲まれた京都の盆地は、風が弱く蒸し暑いので、冬は寒くても、蔭が多くできるだけ風通しのよい家にすべきだという住民の知恵を述べたものです。京に生きた俳人蕪村は、昼は暑くとも朝夕の涼しさを楽しんでいたようです。
＜涼しさや鐘をはなるるかねの声　蕪村＞
＜夕風や水青鷺の脛（はぎ）をうつ　蕪村＞

その京の暑さも近年特にひどくなっています。たまたま、某テレビ局から、「京都の夏はなぜ暑い？」の企画をするので、という問い合わせの電話があったので、改めて気象資料や文献を少し調べてみました。実は京都市に限らず、日本の多くの大都市は、都市化に伴う人工廃熱やコンクリート被覆が多く緑地面積が少ない地表面の高温化による「ヒートアイランド効果」により、1960 年代の高度成長経済時代以降、確実に気温が上昇しています。京都市も年平均気温は 1960 年以降、1 ℃以上上昇しています。気温の上昇率は冬が最も大きいですが、盛夏期特有の「猛暑日（日最高気温が 35℃以上の日)」は、1950～60 年代は 8 月で 6 日前後でしたが、90 年代に入って急増し、2010 年以降は 12 日前後と 2 倍に増えています。都市化は夜間や朝方の気温の低下も抑え、夏は「熱帯夜（日最低気温が 25℃以上の日)」を増加させています。50～60 年代には毎年 10 日前後であった熱帯夜は、2010 年以降は 20 日以上に増加しています。都市化は気温の日変化も小さくしています。これほど暑さが加速しているのは、京都市の都市化の進行だけが原因でしょうか？ 90 年代以降は、「地球温暖化」の影響も重なっているとも考えられますが、この問題はやや複雑なので、後日改めて議論するとして、もうひとつ考慮すべき要因があります。それは、近接する大阪平野全体の大都市化です。大阪平野はかつて、夏の昼間、大阪湾からの涼しい海風が卓越し、内陸深く京都盆地あたりまで吹いていたはずですが、現在は大阪平野全体のヒートアイランド効果のため海風が弱められ、京都盆地にはほとんど入って来なくなっているとの解析結果を気象庁が報告しています。年々暑くなる京の夏には、お隣の大阪周辺の都市化も強く影響しているということです。

かつて市内の町家の軒先や路地で楽しんでいたはずの夕涼みも、今はほとんどできなくなっています。寒暖の気温差が必要だといわれる京野菜も、市内では育てにくくなり、そのため、現在の産地は、都市化の影響の少ない亀岡・綾部の盆地に中心が移っています。まち本来の風情（ふぜい）を取り戻す都市化とはどうあるべきか。今後の課題です。